

## 貧しき彼の苦闘史

彼がはじめて光明団の講演会に出席したのは、今から三年ほど前であった。それから後、彼の真剣な求道の姿は、巖島、於福、大島と本団の講習の度毎に現われた。彼の村の近くにおいて講演会がある時には、二里あるうと、三里あるうと、そこには必ず彼の念仏の姿があった。

彼は彼の村へ、法陣がしきたかった。彼が大悲伝普化の報仏恩の志に燃えはじめたのが二年ほど前からであった。

彼は村の小学校長に懇願した。村の婦人会、青年会、いづれにでも一度講演会がしてほしかったのであった。けれども、それは聞かれそうにもなかった。

金満家の若様でもなく、村内の有志でもなく、唯一介の貧家の青年の言葉がどうして聞かれよう。幾度も足を運んだ。しかし彼の願いは通らない。

だが彼は真剣であった。貧しい中から何十円かの金を村教育会に寄附したのも、教育会を通して宗教々育をこの村人の上にと、思ったからである。それでも彼の願いは葬られる。

小学校長の頭の上には村長がいる。その村長に左右されなくて独立自全の巨歩を進めてゆくことは、可なり自信のある人でないと出来ないことである。賢明なる村長は決して、教育の埒の中へ立入ろうとはしない。又、真に教育者として仕事の出来る人は、決して首をきられることや転任をおそれほしくない。

彼はどうしても彼の願いが通らないので、ますます校長に肉迫した。面談に、手紙に。彼の所信は強かった。言うことはしつかりしている。彼は信念のない教育を認めなかつた。校長も彼の主張には反対はしなかつたのみならず、彼の立場を語って了解を求めた。

彼は拝みだおしもやった。お願いもした。しかしどうしても願は通されなかつた。

そこで彼は戦術を変えた。彼は村長と校長と首席訓導とに、「光明」を一ヶ年本部直送で寄贈したのみならず、「光明」をしばしばこれかと思ふ人に配布した。

「我等の使命」が出た時、さる所で

「先生、これで『我等の使命』を下さい。」と言って十円札をなげ出した。

「どうするのですか」

「私はこれを我が村の青年たちに読んでもらうのです。」

私は泣いた。彼のこの十円は、ある人にとつては一千円であり、一万円であり、十万円である。私は彼の貧しいことを知っている。その志に泣かざるを得ない。

「おい△△君、この世界は真実が易々と通る所ではない。これだけが全部ものを言うと思つては失望するよ。だが、全てがすたつてしまうほど、真実の通らない世界でもない。しつかりやろうぞ!」

と言つて別れた。

彼は六十冊の「我等の使命」を一戸づつ訪問しては配つて歩いた。

更に「聖光」が出るや、三十部宛本部からとつて、これを村人の心ある人に寄贈した。

同胞よ。静かに彼が心になりきって、正法の使徒として黙々として歩む彼の心事になりきって見よう。ともすれば、月十銭の団費すら、二年も三年も滞り勝ちである。然るに堂々金満家ならまだしも、いや借金だけなりとなくて、山の木の少しでも売って、小銭の少々でも余るといふのなら。だが彼にはそんな余裕はなかった。自作小作兼行で、その暇に売薬行商をして生きる彼の、この村へ対する涙は、血のような宝玉ではあるまいか。

しかし彼の血の努力、その血涙は、誰も掬んではくれないで、悲しくも蹂躪されてしまったのだ。万天下の同胞よ。

何が彼の行手に現われて、彼を血みどろけにしたか。

汽車が五月のある日、山陽線を走っていた。その二等車の中で、陸軍の之中将が、「困ったものだ。田舎にまで社会主義が入って青年の中に主義者がおる。」

と語っていた。それが列車内の移動警察の耳に入ったのだ。

中将が言うことである。

「それは、一体何処のことですか？」

中将は彼の村に講演に行つての帰りであつた。△△村に社会主義がいる。その筋へ報告された。

その筋からは、村の駐在所へ調査を命じた。警官は一村内を隈なく調べても、猫の子一匹社会主義はいなかった。五、六、七、八、九月。誰やらわからない。

九月△△日から三日間、彼の宿願が叶つて、光明団の講演会は開かれるのだ。この第一回の講演会が開かれるまでの彼の三ヶ年の苦闘、たつた一人でなされた苦戦。あまり言数の多くもない強そうにもない彼、三十幾才のかれの中には、天地の何をもつても奪うことの出来ない鉄のような意志、いえ金剛不壊の大信が動いていた。その大信が、いやが上にも試練される時が来た。

あれほどの懸命な努力も、迫害と非難と嘲笑との中に葬られてしまひそうになつた。

何がその根源であつたか。

ある日、駐在所は学校に行つていられた。そこへ彼が校長先生に送つた手紙があつた。その中には、

「九月△△日からいよいよ光明団の講演会を開きます。ついでには是非来て聞いて下さい。今頃、村内では私を社会主義だと言いますが、決して社会主義ではありません。」

という意味のことが書いてあつた。警官の疑いは晴れたと言つても、社会主義者と言われたのが誰かということが、そこで警官は一鷹取り調べなければならぬ義務がある。しかし、比較的彼をよく知つてゐる人について、彼のことを調べられた。

「△△は駐在所のお調べを受けたそうだ。」という噂がひろがる。こうしたことを起したのは一体誰であつたか。悲しいことながらそれはこの村の村長さんであつた。

村長の口から、「△△は社会主義だ」という悪宣伝が流れ出たのであつた。陸軍の中将の耳にそうしたことを言つたのも村長であつた。村長から中将へ、中将から移動警察へ、それからその筋へ、その筋から再びこの村へと移されたのであつた。のみなら

ず、彼が村長に一ケ年「光明」を寄贈したために「光明団は私が寄附もしないのに、一円二十銭お金を出したと書いた売名団体だ。即ち社会主義だ。」と言われてしまった。噂は次第に拡大した。社会主義が何やら、共産主義が何やらわからない人たちは、遂に彼を共産党だそうなの、と言いはじめた。無理もない「あの貧乏人が、毎年々々五日間だの一週間だのと講習に行ったり、あれだけ、只で多くの書物を配ったりするのは、ロシアから資金が来るに違いない。」

誠に御挨拶の仕方もないほどの愚にもつかないほどの誤解である。

み法のため、世のため、人のために、一冊の書物すら配ったことのない人の心から見れば、如何にも解けない行動であるに違いない。

彼はかくて愚さと、一種の恐怖とから来る中傷と嘲笑と攻撃を一身に背負って立たねばならなかった。しかもそれが一村としては地位も富も揃った人によってなされることである。

しかし暴風雨の中に立つた野中の一本杉は強かった。

寺のない所で、在家の大きなのを借りてあったが、それも都合で貸して頂けなくなった。

そこで村の中心地で開くことも出来ないで、村の南端、△△部落の彼の家で開かねばならなかった。部落では法座の時は何時も全部落が一致してするのであったが、もちろんこの度は一人であった。

彼は、彼の家を会場にするためには改造せねばならぬ所もある。黒板も造らねばならない。道具を借り集めたり、本家を借りて、私たちの宿にしたり、唯々、九月△△3日待った。彼が行詰つて斃れそうな時、それから二里ほど隔った所にいる△△寺の△△支部長は、激励叱咤した。

だが、同胞よ。

その日が来た。一人も来ないのか、破れるほど来るか。

講演会の幕は切つて落された。

村長、校長、駐在所、有志、そして村民三四十名の来聴者が来た。

私は大乘菩薩道、無我の剣をまつ向からふりかざして立った。

一切の疑いは粉碎された。

彼の眼からは熱い熱い涙が……それは当然である。

その夜から聴衆はうんと増した。第二日、雨、だが、隣村の△△寺からは、院主親子三人で来て下さったし、一里、二里、三里の遠方から一騎当千の求道者がおしよせた。盛会、緊張、村人達は、今更に自分らが尊い人を傷つけたことを知った。

一切の形勢は逆転して潮のような同情が彼を包んだ。

今迄聞いたことのない人までがおし寄せた。

見よ、人々の同情を。だから彼を助けるために投げ出された浄財だつて何時もの法座の三倍であった。彼は誰が下さったか書きつける暇さえなかった。しかも、そうした出費は無産者の人に多かつた。

私はここで多くの友を発見した。そして「先生必ず又来て下さい。」と三日間の講演を了えて帰る時は、来た時とは全く違った空気で皆様とお別れした。

彼の三ヶ年の奮闘は報いられた。聞く所によれば、次には宿を貸そうという家が多  
くて困る位だそうである。私は最後の夜、村民にお願ひして、「どうかみな様、△△君  
をしつかりした人間にするために、大法のお役に立つ人間にするために、どうかしつ  
かりこの上とも鍛えてやって下さい。」と言つておいた。彼こそは、団の本領をその  
ままに実践した尊き純正光明団々員である。あえて同胞に語つて合掌する。